モンマルトルの恋びと

シュザンヌ・ヴァラドン物語

モンマルトルの恋びと

シュザンヌ・ヴァラドン物語

美童春彦

講談社

森の水図書館
昭和
63. 8. 13
111139

モンマルトルの恋びと
—シュザンヌ・ヴァラドン物語—
発行日——昭和六十三年六月十日　第一刷
定価——一五〇〇円
著者——美童春彦
発行者——加藤勝久
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一
郵便番号一一二
電話 東京〇三—九四五—一一一一（大代表）
編集——株式会社第一出版センター
代表　藤田　実
東京都新宿区新小川町九—二五　日商ビル
郵便番号一六二
電話 東京〇三—二三五—三〇五一
印刷所——豊国印刷株式会社
製本所——黒柳製本株式会社
©美童春彦 1988 Printed in Japan

ISBN4-06-203826-9(0)（セ）
落丁本・乱丁本は，講談社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。なお，この本についての
お問い合せは，第一出版センター宛にお願いいたします。

目次

第一部 モンマルトル芸術散歩

一枚の写真から 12
パリーまで 18
シュザンヌ・ヴァラドン 20
〝のみの市〟、凱旋門、シャンゼリゼ 22
パリーの美術館あれこれ 26
画廊街そぞろ歩き 29
オテル・ドルウオーのオークション 31
パリーの地下鉄（メトロ） 34
モンマルトルの丘 36

第二部 シュザンヌをめぐる絵描きたち

海の果実 44
「ブージヴァルの舞踏会」（ルノアール） 50

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

印象派について　56
白髪のシャヴァンヌ　58
〝ラパン・アジル〟の馬鹿さわぎ　63
ロートレックの情熱　67
ポトー街三番地　75
フォンテーヌ街の仕事場　77
エドガー・ドガ　87
〝ル・ミルリトン〟　97
トゥールラック通り　101
二日酔い　108
〝ムーラン・ルージュ〟　114

第三部　恋多き女

オイディプス・コンプレックス　120
ユトリロのみじめな少年時代　122

恋多き女 126
アルコール中毒 132
金髪の少年 136
そのころモンマルトルには 141
アンリ・ルソーをたたえる会 144
駆け落ち同然 148
画商の言い分 153
大きな尻の女性 158
バレエ『パラアド』 163
ユトリロ作品制作会社 169
サン・ベルナールの城館 176
ヴァラドン展 181
レジョン・ドヌール勲章 184
リュシー・ヴァロール 192
ユトリロの結婚 198
青春萬歳 202

行かないで！　205

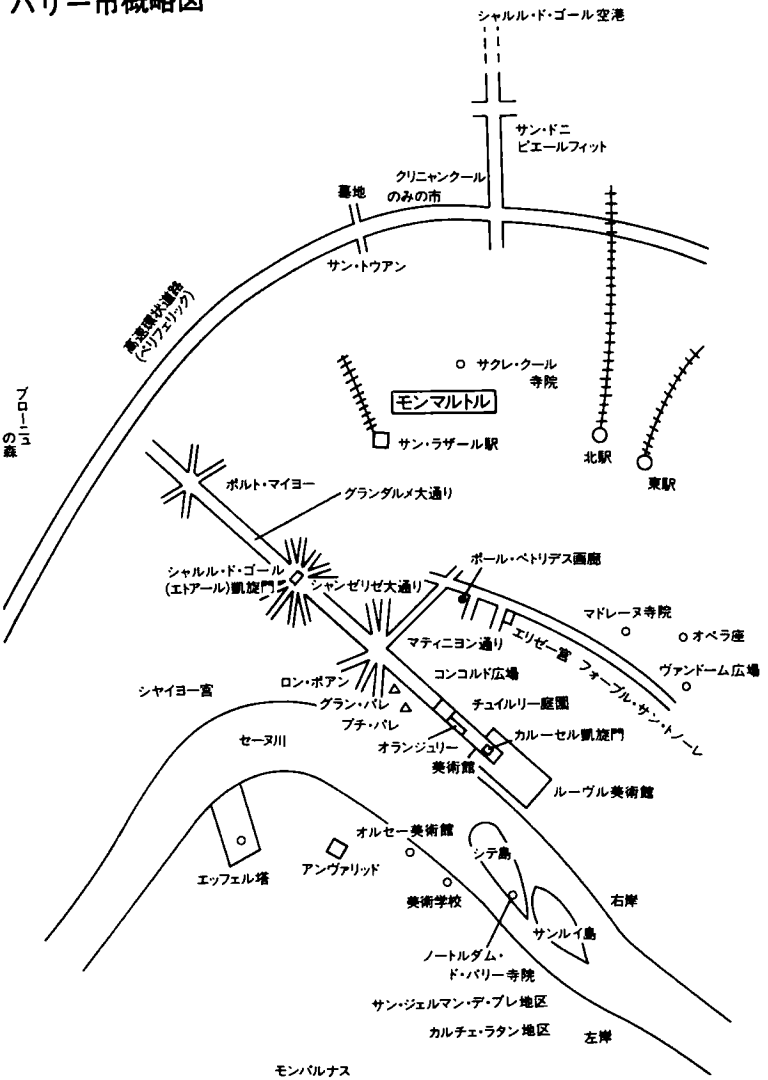
パリ―概略図　6

モンマルトル散策地図　7

カラー口絵　山田　治（作品）

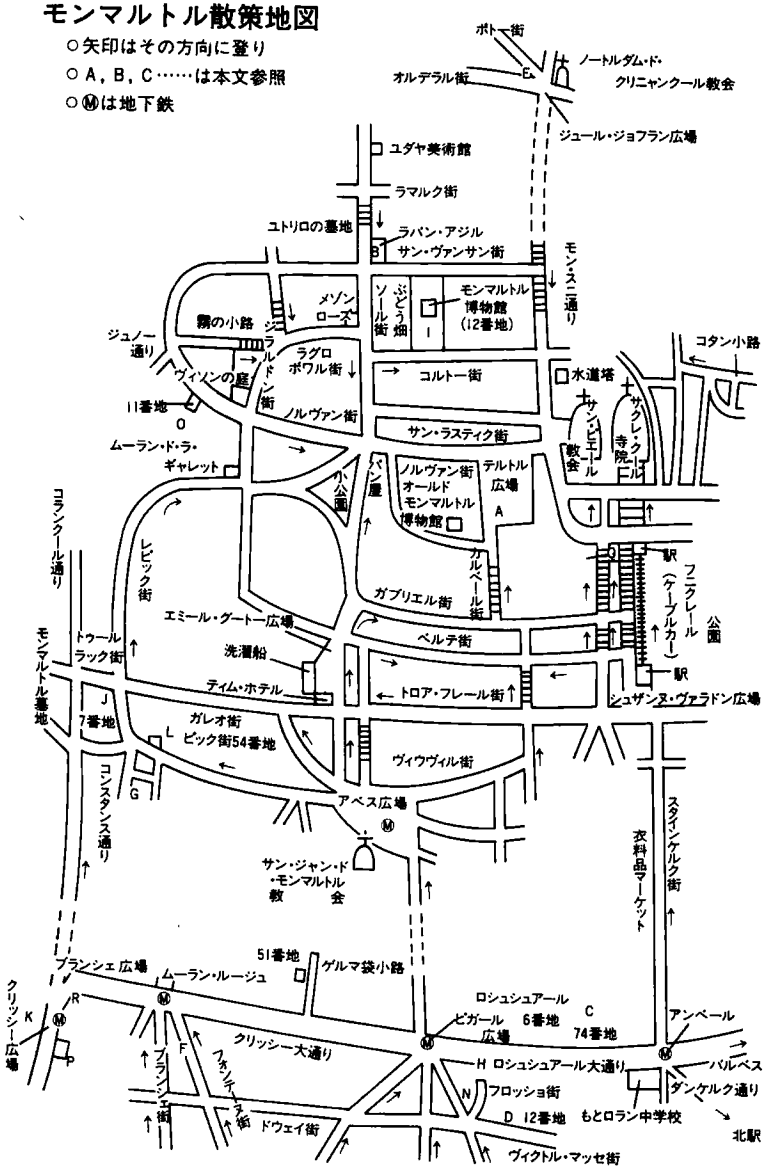
シザンヌ・ヴァラドン物語――写真資料――　209

パリー市概略図


シャルル・ド・ゴール空港
サン・ドニ
ピエールフィット
クリニャンクール
のみの市
墓地
サン・トウアン
高速環状道路
(ペリフェリック)
ブローニュ
の森
サクレ・クール
寺院
モンマルトル
サン・ラザール駅
北駅
東駅
ポルト・マイヨー
グランダルメ大通り
ポール・ペトリデス画廊
シャルル・ド・ゴール
(エトアール)凱旋門
シャンゼリゼ大通り
マドレーヌ寺院
オペラ座
マティニヨン通り
エリゼー宮
フォーブル・サン・トノーレ
ヴァンドーム広場
コンコルド広場
ロン・ポアン
シャイヨー宮
グラン・パレ
チュイルリー庭園
プチ・パレ
セーヌ川
オランジュリー
カルーセル凱旋門
美術館
ルーヴル美術館
オルセー美術館
シテ島
エッフェル塔
アンヴァリッド
美術学校
右岸
サンルイ島
ノートルダム・
ド・パリー寺院
サン・ジェルマン・デ・プレ地区
カルチェ・ラタン地区
左岸
モンパルナス

モンマルトル散策地図

○矢印はその方向に登り
○A，B，C……は本文参照
○Ⓜは地下鉄



装画——山田　治

装幀——森下年昭

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

モンマルトルの恋びと

シュザンヌ・ヴァラドン物語

第一部　モンマルトル芸術散歩

一枚の写真から

パリーの話をしよう。
それも、モンマルトルの物語……。

フランス語で、丘のことをビュットというが、ふつうパリーでただビュットといえば、モンマルトルの丘をさす。
その丘のほぼ頂上で、コルトー街十二番地モンマルトル博物館（地図のI）二階の奥まった部屋のガラスケースに、ひとりの魅惑的な女性の写真が展示されている。
ひきつめに結った長い髪、高い鼻と、いかにも勝気そうなひきしまった口もと、そしていくらか三白眼の目は、まっすぐにどこか遠くの方を見つめている。この青色の美しい瞳は、彼女が興奮すると、みるみる紫色に変化して妖しく光り輝いた。それからあまり大きくはないが、形のよい胸と、ゆたかな腰。あえかで、しなやかな身体……。
まことに華麗にして深奥、憂愁を含んだセミヌードの一葉。
彼女の名前は、シュザンヌ・ヴァラドン……、この本の主人公である。
パリー。

ぼくたち日本人にとって、ついさきごろまで、それはずいぶん遠いところだった。

ふらんすへ行きたしと思えども
ふらんすはあまりに遠し……

とうたったのは、萩原朔太郎だったろうか？

朔太郎の時代には、パリーまで、まだまだ片道一ヵ月以上かけての大行程だったはずだ。

慶応の医学部で、ぼくより二年先輩のなだ・いなだが留学した昭和二十五年ころでさえ、東京からパリーまで、飛行機で三日はかかった。『ぼくだけのパリー』（一九七六年、平凡社）のなかで、なだ・いなだはこう書いている。

――しかし、三日などという日数など問題じゃない。問題なのは旅費であった。金であった。円は安く、ドルは高く、しかも給料は安かった。大学出の初任給を単位にすれば、パリーまでの片道の交通費だけで、その三十ヵ月分をつぎ込まねばならなかった。なんと、三十ヵ月分。往復で、六十ヵ月分だ。ともかく片道だけあればと思っても、帰りの運賃を持っているという証明がなければヴィザもくれない。六十ヵ月分の給料。しかもこれでは、交通費だけだ。さらにその上に滞在費が必要だ。船の方が、飛行機よりは安かった。荷物なみにしか扱われぬのだが、船底の四等船室になればだいぶ安く行けたので、ぼ

くはそれにしたのだが、その旅費さえ初任給十ヵ月分をぶち込まねばならなかったのだ。スエズまわりで、日本から三十日かかった。しかしその三十日という日数よりも、旅費の方がパリーをより遠くに感じさせたものだ。(略)

それがいまでは、エール・フランスか日本航空のノンストップ便を利用すれば、わずか十二時間四十分、午前中に出て、もうその日のうちに直接シャルル・ド・ゴール空港に降り立つことができる。さらには帰りのほうが、気流の関係で、十一時間四十分と一時間も早く成田に着く。しかも割引切符を利用すれば、運賃だって往復二十万円以下からでも。

巴里(パリー)には、およそ十万人の画家が住んでいる……。

すでに昭和十二年(一九三七)、フジタこと藤田嗣治画伯は、画文集『腕一本』にそう記述している。

花の都、パリー。

そしてパリーは、ぼくたちの青春のあこがれでもあった。フランスの首都、世界の文化と芸術の中心地。

ルネ・クレール監督の『巴里祭』、『巴里の屋根の下』、『ル・ミリオン』、『自由を我等に』のパリー。主演の、アナ・ベラ……。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com